

氏名	鈴木 七実
ヨミガナ	スズキ ナナミ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第704号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）平安後期における物語文学の絵画化について －「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」祖本の想定復元研究－ （作品）「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」祖本の想定復元制作

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	國司 華子
（論文第1副査）	東京大学	教授		塚本 磨充
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	荒井 経
（副査）	東京藝術大学	客員教授	（美術学部）	有賀 祥隆
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	高島 圭史
（副査）	東京藝術大学	学術インス トラクター		向井 大祐

（論文内容の要旨）

『伊勢物語』は10世紀初頭から11世紀初頭にかけて段階を経て形成された物語文学（歌物語）である。成立以来『源氏物語』と並ぶ、日本を代表する古典文学作品として親しまれてきた。

『伊勢物語』および伊勢物語絵の初出文献は11世紀初頭の『源氏物語』で、絵合帖と総角帖に絵巻物として登場する。『伊勢物語』の形成過程とその絵画化は不即不離の関係にあり、本文成立後早くに絵画化も行われていたと考えられるが、平安時代に作られた物語絵の大半が既に失われているように、伊勢物語絵も鎌倉時代以前の作品は全く残っていない。

では仮に、平安当時の伊勢物語絵が残っていたとしたならば、それはいったいどのような姿をしていたと考えられるだろうか。作り物語や歌物語といった主に王朝貴族文化を題材とする物語文学を絵画化した作品には、「作り絵」「引目鉤鼻」「吹抜け屋台」など、決まった表現手法が用いられることが知られている。また、基本的に小型の作品で、一紙に一場面が描かれること、動きが少ないことなど、画面形式の点で共通した特徴があることも指摘されている。さらに、近年では科学調査や高精細画像の撮影といった手法が取り入れられたことで、特に技法材料に関して新しい情報が得られる場面も増えてきている。現存する平安時代の物語絵は確かに少ないが、中世の関連作品まで合わせて検討する研究が進み、その輪郭は徐々に明瞭になってきている。こうして今までに明らかにされてきた物語絵の特徴や特質は、当然、平安時代の伊勢物語絵にも当てはまるはずである。

ここで、鎌倉時代（13世紀）制作の「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」（白描本）に注目したい。「白描本」は墨線のみで描かれた白描絵で、現存最古の伊勢物語絵である。先行研究では平安時代の作品（祖本）の転写本であることが指摘されている。池田忍氏によれば、構図や視点、人物の大きさ、配置といった点に12世紀の作品と近い特徴があり、さらに依拠した祖本は彩色本であった可能性もあるという。また、詞書については片桐洋一氏や伊藤敏子氏らによって研究が進められ、定家本以前、つまり鎌倉以前の別本系の本文に拠るものであるという見解が示された。このように、「白描本」は平安の古様を伝える作品として美術史上の価値が高い。

「白描本」は全面に刷られた梵字経により図様が極めて不分明になっている作品である。そのため、これまで多くの研究者は、画家に依頼して作製した上げ写し図をもとに「白描本」の図様の確認を行ってきた。

その結果、現存している断簡の全体像が把握され、分かれてしまっていた絵(断簡)が一図に繋がるなど、さまざまな発見や研究上の進展があった。しかしながら現在は研究が停滞しており、重要な存在である祖本の解明もあまり進んでいない。今、改めて「白描本」の原本そのものを丁寧に観察し、その表現的特徴を把握し直す必要があると考える。そのためには、研究者自身の手で上げ写しを行い、図様を読み取っていくことが重要になるだろう。

本研究は平安後期における物語文学の絵画化を、『伊勢物語』と伊勢物語絵に焦点を当て、「白描本」を研究対象作品に据えて考察するものである。転写本という前提のもとで「白描本」を読み解き直し、現存しない祖本を想定復元作品として視覚的に提示することを本研究の目的とする。上げ写しから祖本の制作年代および技法の推定、想定復元までを一貫して自身で行うという点で、新規性がある研究である。

本論の構成は以下の通りである。

第1章では、王朝時代の伊勢物語絵について考察した。王朝絵画の概要と院政期における物語絵の成長過程を、文献資料と現存する周辺作品を見ながら確認し、初期の伊勢物語絵である祖本の制作時期を推定した。

第2章では、『伊勢物語』の概要と、「白描本」の現状および祖本との関係について確認した。「白描本」の上げ写しと熟覧調査を行い、鎌倉時代の特徴と平安時代の特徴を整理した上で、祖本の表現技法を推測した。

第3章では、技法材料について確認した。周辺作品の熟覧調査と料紙加工の実験結果をもとに、祖本の制作手順を検討した。

第4章では、祖本の想定復元制作に取り組んだ。図像の復元と、技法材料の考証を併せて完成画を想定し、彩色本として絵画化した。

終章では、各章を振り返り、想定復元作品を平安時代制作の祖本にどの程度近づけられたと考えられるかについて述べた。また、現段階での「白描本」の不明点や課題を述べた。そして、「白描本」の作者が祖本をどう捉え、「白描本」を作ったのか考察した。最後に、今後の展望に触れて結論とした。

(論文審査結果の要旨)

本論考は東京藝術大学美術館、逸翁美術館、大和文華館などに分蔵される白描本伊勢物語絵の祖本の想定復元模写を通じて、平安時代の物語の絵画化について考察するものである。まず序章においては復元模写を通じて物語をいかに絵画化するかという描き手の「創作意識」をあきらかにすることが述べられる。続く第1章におけるもっとも重要な論点は、白描本の制作年代およびその制作背景についてである。この点について先行研究をふまえたうえで、白描本のもつ様式的特性や技法を分析し、また前後100年ほどにわたる絵巻表現の展開を詳細に考察したうえで、祖本を彩色本であり、その制作年代を1150～60年代、扇面法華経に近い時期と位置付けた。美術史研究においても意見のわかれてきた部分であるが、画面の詳細な分析から得られたこの結論は十分に説得力があり、また復元模写を行うに際して最も重要な基礎となる判断と言える。

第2章では白描本の実地での詳細な調査、および三井田久子氏、中村岳陵氏模本との比較を通じて、白描本の性格を位置づけることを試みる。そこで現存する白描本が同時期鎌倉時代の白描絵画とは異なる表現の質を持つことを見出し、それが彩色から薄墨への置き換えが行われた結果であるとした。また紙継の問題などを想定した後、御簾の節模様などに実際に彩色本であった証拠も論述する。これをふまえて、白描本のもつ自由で素直な表現を、祖本を手元に置きたいという欲求からそれを写した結果であると解釈し、白描本のもつ図像と表現の意味を解き明かすことに成功している。白描本の祖本は、同じ図像を使いながらも、それをやや静かで均質的な表現になったものと想定した。

第3章、第4章ではこれらの研究を経たうえで、具体的な復元制作の課程を記述する。料紙装飾と線描、色彩の関係や、具体的な色目など、一つずつ先行作品を詳細に比較検討して決定していくプロセスは非常に具体的かつ説得力に富んでおり、また全体の雰囲気をもとめてうまく表現していく工夫が論述されてい

る。

平安時代の絵巻は関心が高く、日本美術史にとって重要な問題を多く含んでいるために新規の研究が難しい分野とされてきたが、本論文では膨大な論文や資料を読み込み、具体的な作品調査から、現存しない平安時代の物語絵の復元模写に成功した。仮名書の制作にも意欲的に取り組んだことも高く評価される。困難な分野に正面から取り組んだ意欲的な研究であり、十分な成果があげられたと言うことが出来る。

(作品審査結果の要旨)

鈴木七実さんは、現存しない「伊勢物語絵巻」祖本の姿を学術的に考察し、一卷の想定復元模写として提示した。これまでに「伊勢物語」の祖本については、おもに日本美術史の研究者によって様々に想定されてきたが、鈴木さんはそれらの先行研究を踏まえた上で新たな知見を加え、自身が培ってきた日本絵画の技術や画家の感性によって作品としての可視化を成し遂げている。

鈴木さんが想定した「伊勢物語絵巻」の祖本は、金銀箔や雲母によって彩られた料紙に描かれたものである。その制作には打ち紙、截金、雲母引き等の技術が必要であり、なかには未解明の技術も含まれていたが、鈴木さんは多くの試行を重ねることによって妥当な技術を見出し、複数の装飾技法を組み合わせた料紙を完成させている。絵画では、比較的古い写しとされる「梵字経刷白廟伊勢物語絵巻」を参照することとし、写真画像からの描き起こしだけでなく、断簡となっている原本の熟覧によって描線の質や墨の濃淡表現という詳細を調査した。また、重要な関連作品である「寝覚物語絵巻」等の熟覧によって、料紙装飾と線描、彩色の関係性に知見を得ている。そうした知見を復元模写として統合していくにあたっては、最終稿とほぼ同等の試作を描いて指導の場に供し、助言を受け止めて推敲していくという入念な態度で臨んだ。さらに、絵巻物において重要な役割を担う詞書については、書家からの指導を受けながら書法を体得し、自ら揮毫している。そして、絵画面と書写面を繋いで卷子装に仕立てる装潢もまた、本学で習得した技術によって本人が行なったものである。

復元模写には、学術的復元が払拭しきれない硬さがやや残るものの、考え得るあらゆる方向からのアプローチを試みて不完全情報を統合し、祖本の制作ではおそらく分業されていた多種多様な技術のすべてを独力で集成したことは驚くべきことである。以上の見解と評価は複数の審査員が共有するものであった。鈴木七実さんが学位申請研究の一環として提出した「伊勢物語絵巻」祖本の想定復元模写を文化財保存学における優秀な作品と評価し、合格とした。

(総合審査結果の要旨)

鈴木七実さんの研究は、もし平安当時の「伊勢物語絵巻」が残っていたとしたならばどの様な姿であったのだろうかという大胆な発想から始まり、幾重の考察と試作を繰り返し、最終的に想定復元模写という巻物の作品に仕上げたものである。そしてその特徴として本研究は一貫して実践に重きを置いており、図像復元に留まらず、料紙準備、歌書の筆文字、仕上げの装潢と全ては研究者自身の手で行われている。

現存しない対象作品を想定復元する研究は、部分的な欠損を補う復元や古さを戻す復元とは始まりからその工程は大きく異なる。まずは現存しないとされている「伊勢物語絵巻」の祖本の姿を探り出していく為の広範囲の情報の収集から始まり、徐々に積み重ねた根拠と思慮を持って丁寧に一要素ずつを炙り出していく。次に自らの絵画的経験から画面に試作し、やり直しを厭わずその是非を再考察し、視覚化された画面も幾度の試作によってその質を上げる努力が繰り返された。近づこうとしながらも回り道も避けない研究姿勢は、物語絵への憧れと探究心によるものに思われ、その努力は終始持続していた。

最重要要素である図像においては、祖本の転写本である可能性が指摘されている鎌倉時代製作の白描本「梵字経印刷白描伊勢物語絵巻」に注目し調査を行い、梵字に埋もれた絵柄を読み取り抽出している。同

時に調査が叶った「寢覚物語絵巻」からは料紙の雲母地塗りと箔装飾の詳細な観察を行っている。同作品からは同時に彩色の高質な状態や佇まいに接し、この経験が研究作品の彩色段階での指標となったと思われる。

結果として形となった想定復元模写作品は、複合的なものの精査と実践的な工程を経ることで名実研究の集大成となった。もちろん未確定要素も有るが、それも含め意義ある手掛かりであり成果と言えよう。

「伊勢物語絵巻」に焦点を当てた今は見ることの出来ない平安時代の物語文学の絵画化を試みるこの研究は、一つの目指した世界観の形を提示する事に成功したと考える。優秀な過程博士研究として評価に値する。